



Title	上田辰之助博士を憶ふ
Author(s)	齋藤, 勇
Citation	一橋論叢, 37(5): 435-439
Issue Date	1957-05-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/3941
Right	

上田辰之助博士を憶ふ

齋藤勇

故上田辰之助博士は博學なかたであつた。經濟學が專攻であり、社會職分を基調とするトマス・アクィナスの經濟思想に關する研究によつて學位を得たのであるが、その後は様々な方面にわたる研究または隨筆を發表された。經濟學には全くの門外漢であるから、私は故人の思出をしるしながら、故人が晩年心をこめて研究の資料とされたイギリス文學に關することを書いて、痛惜の一文としたい。

思出といつても、私はひつこみ思案の男だから、何かの必要があつて面晤の機會を得る人でなければ、人と話すことがすくないので、上田さんについての逸話などをよく知つてゐるとは言へない。しかしその知遇を得たのは、新しいことではない。三十一年も前から始まる。上

田さんはその頃既に東京商科大学における英語教育について、おしもおされもせぬ中心人物であつたらう。それは“Memorials of Naibu Kanda” (1927) 編纂者として見事な成績を挙げたことによつても知られる。そのころ神田男爵記念基金によつて商大は英文學の講義を創始し、しかも必修課目としたので、講師を物色するにあたり、上田さんは私を推薦されたい。とにかく私は同氏から交渉を受けた。ところが私は英國留學から歸つて間もない時であり、業績を挙げてゐなかつたので、微力を痛感してゐた。言はば白面の一書生であつたから、私は推舉を忝いと思つた。そして結局、一九二六年から、商大の國立移轉後まで數年間、へたな講義をすることになつた。それにも拘らず、出講の日にはいつもか

けちがひで、上田さんの警咳に接することがなかつた。惜しいことをした。せめて、たまにはその書齋にたづねて、多方面なこの學者の教へを受ければよかつたのに、それもせずに數年が過ぎてしまつた。

しかし寛大な上田さんは、「トマス・アクキナス」、「經濟人・職分人」、「蜂の寓話」など、つぎつぎに高著を惠投された。私の悪いくせで、禮狀も出さず、全く失禮千萬なことを重ねたかも知れないが、すべて寄贈書は珍藏してゐる。上記三書も、今、机上に置いて、故人をしのぶ心を深めてゐる。

このうち「蜂の寓話」はイギリス文學にも關係がある。それを書いた Mandeville (上田さんは「經濟人・職分人」の中ではマンデヴィル、「蜂の寓話」の中ではマンドヴィルとしてゐるが、とにかく三音節から成る) は、第十八世紀初葉における現實主義を代辯する者と見られよう。この諷刺詩の第六版(一七三二年)は、卷末に複製されてゐるが、その扉に副題として“Private Vices, Public Benefits” (私人の惡徳は公共の利得) とある通り、蜜蜂がぶつぶつ不平を鳴らしてゐる間はよく協力して蜜を

集めるが、その不平がなくなり善人になつてしまへば、働かないで巢を空っぽにしてしまふからだめだといふ譬話によつて、社會の眞相をうがつたつもりで諷刺文學である。上田さんの言葉を借りるならば、「十八世紀初頭のイギリス社會を辛辣に諷刺してゐる點において、後世のいはゆるホーモ・エコノミクス的人間性格を露骨にかつ誇張した形において叙述してゐるもの」である。

この思想を説明するために、マンデヴィルの傳記、當時のイギリス、その前後の思想家たちについて、懇切丁寧に、時には韓非子、マキャヴェリ、カステイリオネなどまで引合に出しながら、縦談横議、委曲をつくし、そして折々の餘談もおもしろいのが、上田さんの著書なのである。原詩の譯も添へてあるが、私は氏自身の散文の輕快な表現に一層興味をもつて讀んだことを思ひおこす。

「經濟思想の外、イギリスの哲學や歴史や政治も心得ていなければならぬが、とりわけ英語英文學には普通以上の造詣がないとマンデヴィルの正しい評價はむづかしい。本當をいうと、かれの文章に朱を入れるくらい

見識が望ましい」と、上田さんは書いて居られる。そしてこの人は、かやうに公言してもよい人であつた。

この本を御執筆中の頃から、上田さんは度々東京女子大學の學長室に来て下すつた。時には愛犬をつれて。吉祥寺のお住居から近いので、散歩がてらだといふことであつた。その頃、「齋藤先生、英文學の弟子入りをさせて下さい」と一再ならず言はれた。これはもとより冗談であつたらう。第一、私を先生などと呼ぶことがおかしい。例のひやかしだなど思はないのは、よほどの阿呆ばかりであらう。「寓話」の中には、「シャフツペリはかかる批判の形式として諧謔と揶揄(humor and raillery)とを重視する」とあるが、この點においてはシャフツペリ伯爵も上田博士も共通の特色を有つてゐた。——急逝直後、上田さんの舊友であり親友である、そして我々が尊敬してゐる一婦人は、“He was a great tease.”と言つたが、その通り、上田さんはひやかしたり、からかつたりすることが好きであり、上手であつた。

機智に富み、考へ方が早く、聰明で、敏捷に物が言へる人であつたから、私のやうな魯鈍、或ひは鈍重、少く

上田辰之助博士を憶ふ

とも考へ方ののろい男が、一矢報いずんばあるべからずといくら焦つても、中々うまい言葉が出てこないのを見ると、兒雀を前にして犬が悠然と見据えるやうに、自信満々、阿々洪笑するといふ風であつた。「弟子入り」といふよりも、むしろ、ひやかし半分、氣のおけない談笑の相手を求めたのであつたらう。

とにかく、体が大きいばかりでなく、人間も大きい上田大人は、折々私のへやに来て、私が即答のできないやうな問題を出して喜んでゐた。例へば、John Tutchinの詩“The Foreigners”といふのは、どんなことを書いたものか、といふ試験問題は、英文學に關するものだが、かやうな作を私は讀んだことがない。あとで調べてみると、一七〇〇年出版、その後印刷されたことがないので、初版をもたなければ讀みやうもないしるものである。(この詩については「蜂の寓話」二六頁に言及してある。)

上田大人は「昔も今も變らぬジョン・ブルの神經の太さと、かれら一流の幽默モウチキとに敬意を表せざるを得ない」人であつた。しかし「幽默」の黙は、この大人にはあて

はまらない字であらう。英米人に對しても、大人はたえずヒューマー、ひやかし、からかひ、何かを飛ばして人を笑はせたやうだ。或る時、偶々大人は若いアメリカ人夫妻の自動車に乗せてもらつて、牛込から東大まで行つた。途中、車の前方の席に夫君とならんでゐる奥さんに對つて、*sight-seeing* ができてうれしいと言つた。また時には辛辣な皮肉もあつた。私が學長をやめてからのことである。「魅力がなくなつた、もう自動車に乗せてもらへないから」といふ御挨拶があつた。

「弟子入り」と稱して油を賣りに來てくれた方に、私はずうずうしくも一つのことを頼んだ。それは東京女子大學寄附行爲英譯の件である。譯はひと通り出來上つてゐたのであるが、どうも専門的な術語の心得が不十分な人の譯文であるから、英語の堪能な點においては申し分がなく、その上法律上の用語をもわきまえて居る方に見てもらひたかつたのである。私の懇請をいれて、上田博士は徹底的に筆を入れて下さつた。原文に忠實で、譯語が的確で、これ以上のものを望み得ない。東京女子大學はこれを誇りとしてよからう。私は矢野理事長同道、お

禮に出たことであつた。「弟子入り」の入りかはりである。ちなみに、この譯文に對すると同じやうに、感謝に堪へないことは、ブランドン詩宗が實に適切なすぐれた校歌をたちどころに作つてくれたことである。

さて上田博士晩年の研究主題は、第十八世紀前半の英文學に現はれてゐる經濟思想であつたらしい。博士の關心がマンデヴィルから溯つて、「ヒューディブラス」の作者バトラーには行かずに、アデイソンやステイルに向つたことは、うれしい。そしてその最初の成果として一橋大學「Annals」に發表された「Mr. Spectator as an Economist」は、歿後發表の「Saikaku's 'Economic Man」と共に、近年の博士の學殖と文才とを傳へる雙璧と稱してよからう。私には前者が一層興味深い。かやうな研究が相次いで現はれるならば、日本の學問的水準がいかに高いものであるかを世界に誇り示すことになつたであらう。

終りに、ひとつ書きおとしたくないことがある。それは上田博士と二三度議論めいたことをした問題である。博學で、様々な事柄に興味をもち、そして實際生活と學

問とを結びつけて考へることの多い人として、博士は日本の英文學者が經濟問題にややもすれば無關心であることを度々痛歎して居られた。そこまではまさに傾聴すべき言葉である。しかし經濟を無視する者には正常な文學批評ができないかの如き口吻を聞くことさへあつた。或ひは、さういふ風に誤解させるやうなこともあつた、といふ方が間違ひあるまい。それは、氏の如く、文學を資料として經濟思想を究明する學者にとつては、ありがちな意見であらう。かつ現にそのやうな研究、例へば前に記した「スペクテイター」論などによつて、我々が益するところは誠に大きい。誰も、さういふ研究法を否定する者はあるまい。ただしその研究法は、大概の場合、文學そのものの鑑賞ではなく、ほかの目的に文學を利用することになる。従つて文學の内的（イントリンシク）價值よりも外的（エクストリンシク）價值に重きを置く批判となりがちである。この點は、遺憾ながら、なかなか納得してもらへなかつた。そして、もはや地上では話し合ふことができない。

昨年十月八日、と思ふが、國際キリスト教大學の一室

上田辰之助博士を憶ふ

で、四五人心置きなく雑談しながら軽い晝食をしてゐた時、上田さんは突然私に「齋藤先生はお仕合せですね」と言はれた。私は、また「先生」づきで、ひやかしが始まると思つたらしく、何心なく「さうですよ、上田先生のやうな悪口屋の知遇を得て」と言つてしまつた。それから僅か五日ののち、急逝の訃音に接して、私は言ふところを知らなかつた。そして今も尙悔いなきを得ないのは、まともな返事をして心ある友の言葉に耳を傾けなかつたことである。

矛盾して意味をなさないやうな表現だが、上田さんは現實主義に徹底しようとした理想主義者であつた。そしてそのやうな學者から私は大いに學ぶべきであつたのに、重ね重ね惜しいことをしたと思ふ。

（東京女子大學前學長）